

# 冒険キャンプ経験が女子大学生の Locus of Control に及ぼす影響

橘 直隆

The Impact of Adventure Camp Experience  
on Locus of Control in Female College Students

Naotaka TACHIBANA

## Abstract

The purpose of this study was to examine the change of "Locus of Control (LOC)" in female college students who participated in Adventure camping. Subjects were 63 female college students. LOC questionnaire by Kamahara as measured LOC was administered in pre- (before camp), 1st-post- (after camp), and 2nd-post-test (3 months after camp) design.

The following result were obtained.

- 1) LOC of participants as a whole showed significant change to internality between pre- and 1st-post-test, but no significant difference between pre- and 2nd-post-test.
- 2) LOC of external group showed significant change to internality between pre- and 1st-post-test, and significant difference between pre- and 2nd-post-test.

キーワード：冒険キャンプ，女子大学生，Locus of Control

## I. 緒言

教育キャンプにおいて、目的やねらいの達成度を検討するために評価は欠くことのできないものであり、また、よりよき指導法やプログラムの開発のためにも必要不可欠のものである。Van der Smisssen<sup>22)</sup>はキャンプの目的を、1) 個人と環境との関係、2) 個人と他人との関係、3) 個人と彼自身との関係、に分類し、これらを認識、改善(拡大)することが重要であると述べているが、近年、ストレスを伴うアドベンチャープログラムがキャンプの内容として重視される<sup>6)</sup>にしたがい、その評価法として“個人と彼自身との関

係”に属する自己概念を変数とし、その変容からキャンプの効果を検討しようとする研究が多く見られる。<sup>1)11)</sup>

わが国においても、井村<sup>10)</sup>飯田ら<sup>8)</sup>は小中学生を、井村<sup>9)</sup>は中高生を、川村ら<sup>14)15)</sup>星野<sup>4)</sup>影山<sup>12)</sup>は大学生を、それぞれ対象にし、冒険的要素を含むキャンプの前後に自己概念を測定し、いずれも自己概念の向上がみられたと報告している。このうち、持続的効果を追跡研究した川村らは、2ヶ月後にも効果がみられる<sup>15)</sup>ものと、効果がみられないもの<sup>14)</sup>を報告しており、自己概念の持続的な効果についてはまだ明らかになっていない。自己概念の向上にかかわる要因について検討した井

村<sup>9)10)</sup> 飯田ら<sup>8)</sup>はストレス克服体験を、星野<sup>4)</sup>は自我関与の強さを、影山<sup>12)</sup>は達成感・充実感を感じさせる成功経験を、その要因であるとしている。

自己概念を変数とした報告が多い一方、米国における近年の研究傾向について井村<sup>11)</sup>は、Locus of Controlを変数とした報告の増加に注目している。Locus of ControlはRotterらの社会的学習理論<sup>3)</sup>で、ある状況において強化を与えられた行動は、強化の受け手が、その強化を何と随伴したものとして認知するか、言い替えば、何がそれを招いたと知覚するかによって、その後の行動の生起可能性の増減を決定するというものであり、自分自身の行動に随伴しない「運」や「力のある他者」によるもので統制が不可能と感じるものをExternal Control、自分自身の行動に随伴した「努力」や「能力・特性」によるもので統制可能感を持つものをInternal Controlと呼んでいる。達成動機・やる気<sup>16)</sup>がInternalに、無気力・無力感<sup>2) 19)</sup>がExternalに関係しており、自分を奮い立たせてストレスを克服することによる成功感や達成感の経験を重視する冒険プログラムや、冒険的要素を含むキャンプの効果測定に適した変数のひとつと考えられる。

Locus of Controlを変数として用いたキャンプや冒険プログラムに関する研究を概観すると、Nowickiら<sup>18)</sup>は黒人を中心とした少年を対象に1週間のキャンプを、Wright<sup>24)</sup>は非行少年少女を対象に26日間のOutward Bound Schoolタイプのウィルダネス・プログラムを、Williams<sup>23)</sup>はアルコール等の薬物乱用者である少年少女を対象に3日間の身体的挑戦プログラム(カヌー、岩登り、バックパッキング等)を行った結果、いずれもInternalの方向への変容がみられたと報告している。しかし、Huie<sup>7)</sup>は13名の学生を対象に3ヶ月の冒険的なウィルダネス・プログラムをおこなったが、有意な変容はみられな

かったと報告している。わが国においては、Locus of Controlを変数としたキャンプや冒険プログラムに関する研究は端緒にいたばかりである。

鈴木ら<sup>20)</sup>は短期間の運動経験と人格変容との関連に関する研究を概観し、経験の質的内容と変容の持続性の吟味を含む研究計画が今後必要であると述べているが、短期間のキャンプ経験においても同様な研究計画が必要であろう。そこで、本研究は、ストレスの多い冒険的要素を含む教育キャンプの参加者を対象にして、キャンプ直前・キャンプ直後・3ヶ月後にLocus of Controlを測定し、キャンプ経験による変容とその持続性を検証し、変容にかかわる要因を参加者の日記と感想文をもとにして事例的に検討することにより、キャンプ指導およびプログラム開発に資することを目的としている。

## II. 研究方法

### 1) 対象

昭和61年8月29日から9月2日にかけて静岡県朝霧高原で行われたC女子大学2年生の授業「キャンプ実習」(4泊5日)の受講者67名のうち、データに欠落のない63名を対象とした。

### 2) 調査内容と手続き

#### ① Locus of Control (以下、LOC)

鎌原ら<sup>13)</sup>が作成した36項目からなる質問紙を使用した。LOC得点は高くなるほどInternalであり、低くなるほどExternalである。

Pre test (キャンプ前)は、キャンプ1日目のオリエンテーション前に、1st Post test (キャンプ後)は、キャンプ最終日の静思終了後に一斉に実施した。2nd Post test (3ヶ月後)は11月28日から12月12日の間に対象者個々に手渡し、その日のうちに回収した。

## ② 日記および感想文

キャンプ中、毎夜消灯30分前にB6版の用紙を配布して日記を書かせ、消灯時に回収した。記入内容に関しては、キャンプ開始時に自分のこと、他人のこと、自然のことについて書くように説明したが、以後いっさいの指示はしなかったため、実際には、ほとんど自由記述に近かった。

また、内容による評価は絶対に行わないと言明して、「キャンプ中の自分を考える」という題の感想文を、キャンプ1ヶ月後を期限として提出させた。

日記および感想文の内容に関して、自己概念の変容にかかわる要因として考えられるストレス克服、達成感・充実感、自我関与に関するものが記述されているかを評定した。自我関与に関しては、その内容をより吟味するため、橋ら<sup>21)</sup>のキャンパー側の視点によるキャンプ効果の因子分析を参考にし、人間関係、出会い、自律自発性、自己拡大、自己客観視、自然認識、日常の便利さの7つの観点から、非常に肯定的・肯定的・否定的の3段階に評定した。評定者は本研究である。

## 3) キャンプの概要

### ① 班編成と指導者

参加者は、活動の単位となる8~9名からなる8班に分けられた。班編成にあたっては、日常的に交流のない者が同じ班になるよう配慮した。指導者として、野外活動を専門とする大学教員と野外活動を専攻する大学生を、2班にそれぞれ1名の割合で配置した。したがって、班担当指導者は大学教員4名と大学生4名である。この他に、大学教員3名と大学生5名が全体的な指導と運営にあたった。

### ② 生活環境と施設

野外活動センターの上級者用キャンプ・サイトを使用した。キャンプ・サイトは野外活動センターの本部施設から離れ、完備

された施設は便所と簡易水道および緊急用の放送設備だけである。参加者は自らの手で設営したテントを住居とし、食事はすべて裸火の自炊という、いわゆる原始的形態のキャンプである。

### ③ プログラム

プログラムはTab.1に示した。主なプログラムは次のような内容である。

- ・冒険ハイキング 途中に関門を設け、そこで要求される課題を解決しない限り、次に進めないハイキングである。課題は、全員の創意、身体的努力、意志決定、協力を要求するイニシヤティブ・ゲーム、ニュー・ゲームを中心とした。

Table 1. Camp Programs

Day 1	Day 2	Day 3	Day 4	Day 5
	HEAVY RAIN	Mountain Climbing	Variable Activities by Camper's Choice	Packing Cleaning Meditation
Orientation	↓	↓	↓	
Setting	Adventure Hiking			
	Cooking Contest			
Welcome Campfire	Party	Stargazing	Campfire	

- ・登山 標高差1100m、帰着まで10時間の行程で、キャンプのメイン・プログラムとして行われ、全員が登頂した。
- ・選択活動 各スタッフが準備した活動を参加者が選択するもので、洞穴探検、サイクリングなどの動的活動、崩壊路整備、ファイヤ用の薪割などの奉仕的活動、キャンプ・クラフト、絵はがき作り、笹茶作り、野草料理などの文化的活動、座

禪, ソロ体験などの静的活動と多岐にわたっており, いずれも自然環境資源を利用するものである。

④ 天候

1日目の夕刻から小雨となり, 夜に入って雷が混じったが, 歓迎ファイアーは雨で行った。2日目の夜明け前には, キャンプサイト内の坂道が流水のため崩れるほどの豪雨となったが, 10時頃には止み, 昼には晴れた。3日目は快晴, 4・5日目は晴れであった。

Ⅲ. 結果と考察

1) Locus of Control の変容

キャンプ前, キャンプ後, 3ヶ月後のLOC得点をTab. 2に示した。LOC得点は, キャンプ前よりキャンプ後のほうが有意に高く, これはキャンプ中にInternalの方向へ変容したことをあらわしている。しかし, キャンプ前と3ヶ月後のLOC得点には有意差がみられず, キャンプ中にみられたInternalへの変容が3ヶ月後まで持続してないことを示している。

LOCの変容が, 参加者全体にわたるのか, それとも特定の傾向をもつ者だけにみられるのかを検討するため, キャンプ前のLOC得点の低い者から3分の1をExternal Group (E群) 高い者から3分の1をInternal Group (I群) とし, それぞれについて, キャンプ前, キャンプ後, 3ヶ月後のLOC得点を比較した。(Tab. 3・4) E群の得点は, キャンプ前に比べてキャンプ後が有意に高く, また3ヶ月後もキャンプ前に比べ有意に高かった。この結果は, E群はキャンプ中にInternalへの変容が大きく, それが3ヶ月後まで持続していることを示している。

I群においては, キャンプ中には変容がみられないものの, 3ヶ月後にExternalへの変容がみられた。したがって, 全体的に平均

値の方向へ変容しているとも考えられるため, 分散を比較 (Tab. 5) したが有意な差はなく, 平均値方向への収束傾向はみられなかった。

以上の結果で明らかになったのは, 参加者全体のLOCは, キャンプ中にInternalへの変容がみられたが, 3ヶ月後まで持続しな

Table 2. Differences in LOC scores of All Campers

(N=63)			
	Pretest	1st-Posttest	2nd-Posttest
M	52.4	54.8	53.8
SD	5.8	5.6	6.3
	Pre - 1st Post	1st Post - 2nd Post	Pre - 2nd Post
t	2.257*	-0.832	1.319

\* P < .05

Table 3. Differences in LOC scores of E Group

(N=21)			
	Pretest	1st-Posttest	2nd-Posttest
M	46.1	51.8	50.9
SD	3.4	5.9	6.0
	Pre - 1st Post	1st Post - 2nd Post	Pre - 2nd Post
t	3.695**	-0.479	3.082**

\*\* P < .01

Table 4. Differences in LOC scores of I Group

(N=21)			
	Pretest	1st-Posttest	2nd-Posttest
M	58.8	57.7	55.7
SD	2.4	4.5	5.2
	Pre - 1st Post	1st Post - 2nd Post	Pre - 2nd Post
t	-0.956	-1.336	-2.459*

\* P < .05

Table 5. Differences of Variance in LOC scores

(N=63)			
	Pre - 1st Post	1st Post - 2nd Post	Pre - 2nd Post
F	1.061	1.233	1.162

かったこと、および、キャンプ前に External の傾向を持つものは Internal への変容が大きく、それが3ヶ月後まで持続することである。

冒険プログラム経験がLOCに有意な影響を与えなかったと報告したHuei<sup>7)</sup>の対象者は一般の学生であり、冒険プログラムにより Internal 方向への変容がみられたと報告したWright<sup>24)</sup> Williams<sup>23)</sup>の対象者は、それぞれ非行少年少女と薬物乱用少年少女であった。この対象者の属性から推測すると、Internal 方向への変容がみられた対象者のLOCは、より External の傾向を持つと考えられる。本研究においても、キャンプ前に External の傾向を持つものに Internal への変容が強くみられた。これらを考えあわせると、冒険プログラムはより強い External 傾向を持つものに対して効果が大きいと推測されるが、今後さらに検討する必要がある。

## 2) Locus of Control の変容にかかわる要因

LOCの変容の要因を事例的に検討するため、参加者の中から典型的な変容傾向を持つ者を選び、その日記と感想文を評定した。対象者は、External から Internal へ大きく変容

したものの5名(I型)である。また、比較対象とするため External のままでほとんど変容のみられなかったもの2名と、Internal から External へ大きく変容したものの2名の計4名(E型)の日記と感想文も評定した。

参加者の多くの日記と感想文にあげられていたストレスは、

- ・予想以上に人工物が少ないキャンプ場の自然環境
- ・1日目から2日目にかけての雨
- ・あまり話したことのない人との人間関係
- ・真剣に考え協力しなければ課題が解決できない冒険ハイキング
- ・身体的に苦しい登山

であり、雨以外は本研究者が意図したストレスである。

日記と感想文の内容を整理したのが Tab. 6 である。ストレス克服は、I 型の3名にのみ記述され、その他の型にみられないことから Internal への変容に関与していると推測される。特に被検者Cは「ドシャブリで迎えた初日、私たちは拒否反応しか示さず、その場を切り抜けようとしなかったように思いま

Table 6. Arrangement of Substance of Journal and Description of Impression

変容の方向	被検者	得点の変化	ストレス克服	達成感・充実感	人間関係	自覚性	出会い	自己拡大	自己客観視	自然認識	日慣れ
E→I	A	44-57-60		○	●		○	○	○×	○	
	B	47-57-62		○	○		●		○		
	C	44-56-52	●	○	○×	●	○		○×		
	D	46-55-57	○	○	●		○	○	○	●	
	E	46-53-55	○	○	○		○	○	○		○
E→E	F	43-32-37		○	×				×		
	G	50-48-49		○	×					○	○
I→E	H	56-52-46		○	○				×		
	I	57-53-49		○		×			×		

● Very Positive

○ Positive

× Negative

す。(中略)しかし、それが時がたつにつれて少しずつ変わってきました。(中略)いやな事でも誰かがやらなくてはいけないのです。力を合わせてさまざまな困難を乗り越えられるようになりました。」と具体的な描写を付け加えながら、感想文の半分近くををストレス克服の過程について記していた。

達成感・充実感に関しては、対象者全員が記述していた。また、E型I型にかかわらず、ほとんどの参加者が登山後と最終日の達成感・充実感に触れており、これはLOCの変容と独立していると推測される。

自我関与に関しては、I型に多くの側面で深い関与がみられた。被検者Aの「人のことが考えられるようになった自分を発見した喜び、そして班員が私のこの発見を裏付けるかのように私に感謝してくれたこと、私も素直に感謝をかえせる気持ちなど、今までになかった感動でした。(中略)人を見つめ、自分を見つめ、このキャンプを真剣に過ごしていたということだと思います。」被検者Bの「その時のみんなの目の鋭さをともなった真剣な顔つきは、日頃みられないものでした。一人一人が、現在の悩み、過去の経験などを暴露しあい、みんなで考えました。いつもケロっとしている友達が、目の前で涙を流して話している姿は、なんともいえないものでした」など、I型には深い感動を伴う自我関与がうかがえる。一方、E型は内容の多くがプログラムの進行の描写およびその表面的な感想であり、自我関与に関する記述はあまりみられなかった。

自我関与がみられるが自己否定や自己矮小を示す、いわばマイナスの自我関与は×印をつけて表した。たとえば、被検者Gの「誰でも平静な状態ではありません。いらいらして他人に対して強い口調になってしまい、自分を抑えることもできませんでした。」、被検者Iの「気分的に不安定と精神的イライラが、その夜の雷とともに眠りを妨げた。“こ

んな事がなんの役に立つのだろう”すこしずつ怒りがこみあげてくるのがわかった。(中略)そうして、班の中ではみ出している自分に気が付いた。」、被検者Iの「何かやらなくてはならない時に、すぐに行動にうつせなくて、人にやらせてしまうことが何度かありました。“誰かがやってくれるだろう”という気持ちが自分の中にあるのがわかり、情けなくなってしまう。」がその例である。

日常生活では経験できない多くのストレスを経験し、それを克服して全員がキャンプ生活をやりとげ、キャンプ後には達成感・充実感を味わっているにもかかわらず、それが必ずしもLOCの変容にかかわっていない。この結果は、ストレス克服や達成が外面的で身体的なものでなく、内面的で精神的なものであり、参加者がそれを意識し自我の中に取り込まないかぎり、Internalへの変容に影響を及ぼさないことを示していると考えられる。言いかえれば、量的に強く大きいストレスを克服したかどうかではなく、克服の過程や結果にどれだけ自我がかかわったかという質的なものが、Internalへの変容に影響を及ぼしているのであろう。ExternalからInternalへ大きく変容した参加者の感想文に、自我関与に関する記述が多いことがその現れであると考えられる。E型は自我関与が少ないうえに、その自我関与も自己否定的なものの割合が高い。したがって、自我関与の内容が自己否定的でなく肯定的であることも、Internalへの変容に影響を及ぼしていると考えられる。LOCのInternalは、成功は自分自身の行動の結果と考えるという、環境に対する統制可能感の指標となるものであり、自己肯定が統制可能感に結びつくのであろう。

このように、参加者にただストレスを与え、それを克服させるだけでは、冒険キャンプによる大きな効果を期待することは難しいと考えられる。指導者に求められるのは、ストレス克服の過程と達成感を、参加者の自我に深

く関与させることと、自分自身を肯定的に見つめる手助けをすることであろう。

Tab. 6 ではとりあげなかったが、環境・人間関係・雨とストレスが重なりあった1日目の日記の内容に、I型とE型の差がみられた。これらのストレスに関してはどの日記にも記されていたが、日記の最終行に注目すると、I型は「けれど、がんばろうと思う」「楽しいキャンプになることまちがいないと思います。がんばりまーす」「大変だけど、あと4日がんばろうと思います」「雨の中のファイヤーは初体験でLucky!でした」であり、E型は「早く帰りたい。悲惨だ」「何があってもめげない元気な仲間達が唯一の救いというものですけど・・・」「すごく、しんどいです。明日は、晴れてほしいです」「なんとか許してほしい」であった。不慣れな自然環境と人間関係に加え、予期しなかった雨という大きなストレスを前にして、この時点ですでにLOCの変容の方向が決定されてしまっているように感じられる。

ストレスの耐性には個人差があり、一般の人にとってそれほどでもないストレスが、耐性の低い人にとってはマイナスの働きをする可能性が考えられる。したがって、効果的な指導のためには、より強いストレスを与えるのではなく、参加者に適したレベルのストレスを提供する必要があるだろう。

#### IV. まとめ

本研究の目的は、冒険的要素を含む教育キャンプの経験が参加者のLocus of Controlに及ぼす影響とその要因を検討することである。その結果、次のことが明らかになった。

- 1) キャンプ経験によりInternalの方向への変容がみられた。しかし、その変容は3ヶ月後まで持続しなかった。
- 2) キャンプ前にExternalの傾向をもつものは、キャンプ経験によりInternalの

方向へ大きく変容し、それが3ヶ月後まで持続した。

- 3) 自己肯定的な自我関与が、Internalの方向への変容の要因と推測される。

本研究においては、統制群を用いなかったが、長期にわたる持続的効果を検討するためには、比較対象として統制群の調査を研究計画に取り入れる必要があるだろう。また、Locus of Controlの変容にかかわる要因を明らかにするためには、自己概念などの他の心理的尺度との関連性を検討するとともに、より綿密な事例的研究が必要と考えられる。

#### 付記

本研究は、中京女子大学昭和62年卒業生森（旧姓近藤）克代氏および63年卒業生織田佳子氏の協力を得て行われた。ここに記して感謝の意を表する。

#### 参考文献

- 1) 赤井利男, 飯田稔: 「Outward Boundとその心理的効果に関する文献研究」筑波大学体育科学系紀要 1, 45-53, 1978
- 2) 波多野誼余夫, 稲垣佳世子: 無気力の心理学, 中央公論社, 1981
- 3) 樋口一辰, 清水直治, 鎌原雅彦: 「Locus of Controlに関する文献的研究」東京工業大学人文論叢 5, 95-132, 1979
- 4) 星野敏男: 「組織的キャンプにおける女子学生の自己概念変化の要因について」明治大学教養論集 155, 59-76, 1982
- 5) Hoshino T.: "Group Dynamics in Japanese and American Camp Programs" Camping Magazine 58-4, 20-23, 1986
- 6) 星野敏男: 「人間教育としての野外教育」明治大学経営学部人文科学論集 34, 49-67, 1987

- 7) Huei J.C.: A Semester Outward Bound Course; "An Exploratory Study of Effect Locus of Control, Values, and Life Meanings" ,Doctoral Dissertation, University of California, 1982
- 8) 飯田稔, 井村仁, Van der Smissen B.: 「冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変容」筑波大学体育科学系紀要 9, 91-101, 1986
- 9) 井村仁: 「アドベンチャー・プログラム経験が中高生の自己概念と不安に及ぼす影響」筑波大学体育科学系紀要 5, 59-70, 1982
- 10) 井村仁: 「短期間のアドベンチャー・プログラム経験が小・中学生の自己概念と不安に及ぼす影響」国際武道大学紀要 1, 15-25, 1985
- 11) 井村仁: 「冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究」レクリエーション研究 17, 21-28, 1987
- 12) 影山義光: 「大学キャンプ経験による女子学生の自己概念の変容と至高経験との関連」運動学研究 (筑波大学体育科学系) 3, 11-16, 1987
- 13) 鎌原雅彦, 樋口一辰, 清水直治: 「Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討」教育心理学研究 30-4, 38-43, 1982.
- 14) 川村協平, 東原昌郎, 木庭修一: 「組織的キャンプにおける自己概念の変化に関する研究」東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育 31, 209-218, 1979
- 15) 川村協平, 橋直隆, 星野敏男, 西田明子: 「組織的キャンプが自己概念の変化に及ぼす影響」山梨大学教育学部研究報告 31, 147-152, 1980
- 16) 宮本美沙子: やる気の心理学, 創元社, 1981
- 17) 中込四郎, 大塚美栄子, 小林禎三: 「スキー実習中の体験過程と自己概念の変化に関する研究」北海道教育大学紀要 (第2部C) 29-2, 11-18, 1979
- 18) Nowicki S., Barnes J.: "Effect of a Structured Camp Experience on Locus of Control Orientation" The Journal of Genetic Psychology 122, 247-252, 1973
- 19) 千石保: 現代若者論, 弘文堂, 1985
- 20) 鈴木壮, 中込四郎: 「スポーツ経験による人格変容に関する研究展望」岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学) 12, 59-72, 1988
- 21) 橋直隆, 川村協平, 星野敏男: 「キャンパー側の視点によるキャンプ効果の因子分析的研究」中京女子大学紀要 18, 171-177, 1984
- 22) Van der Smissen B.: "The Dynamics of Research" Van der Smissen B. (Edit.), Research Camping and Environmental Education, 5-17, The Pennsylvania State University, 1975
- 23) Williams T.E.: "The Effect of a Brief Adjunctive Physical Challenge Wilderness Program on Locus of Control in Adolescent Substance Abusers", Doctoral Dissertation, Okurahoma State University, 1984
- 24) Wright A.N.: "Therapeutic Potential of Outward Bound Process; An Evaluation of a Treatment Program for Juvenile Delinquents", Doctoral Dissertation, The Pennsylvania State University, 1982